2023 年度　慶應ＳＦＣ学会研究助成金　成果報告書

健康マネジメント研究科修士２年　桃井　雛子

活動名称：日本で初等中等教育を受けたアフガニスタン難民の学校生活における主観的幸福感に関する調査

活動の目的：日本で初等中等教育を受けた経験のあるアフガニスタン難民の子どもとその保護者、難民支援団体の職員を対象にインタビュー調査を行い、日本での学校生活における主観的幸福感（ＳＷＢ）について明らかにし、当事者や支援者の視点から学校生活の実態やニーズを理解することを目的とする。

活動内容：関東・関西地域に在住するアフガニスタン難民の子どもとその保護者、難民支援団体でアフガニスタン難民の支援を担当する職員を対象に、30 分から 1 時間程度の半構造化インタビューを行う。インタビューは日本語で実施するが、参加者の日本語力が十分でない場合は、対象言語（パシュトゥー語、ダリー語）の十分な経験のある通訳者を介する。通訳者には研究内容と研究倫理に関しての説明及びトレーニングを実施し、機密保持に関する誓約書に同意を得た上で研究に参加した。

活動の成果:2023 年 9 月から 2023 年 11 月の間に、アフガニスタン難民の子ども 3 人、保護者 2 人、難民支援団体の職員 2 人の合計 7 人にインタビューを実施した。インタビューは参加者の同意を得た上で録音し、音声データから逐語録を作成した。インタビューの結果は質的内容分析法を用いて分析を行い、以下の 4 つのカテゴリー：《学校生活》《家族・社会的サポート》《経済状況》《人生に対する気持ち》が抽出された。研究の結果から、アフガニスタン難民は初等中等教育において、いじめや差別、学業の難しさなどの様々な困難を経験していたと同時に、多くのアフガニスタン難民は学校生活に楽しみを見出し前向きな感情を持っていることがわかった。また、アフガニスタン難民の主観的幸福感（SWB）において、教師の影響が大きいことが明らかになり、教師への教育やトレーニングの必要性が示唆された。さらに、難民支援や教育の現場では、アフガニスタン特有の文化・宗教的規範を理解し、アフガニスタン難民の子どもへ適切な支援を提供することが求められる。研究の結果は修士論文としてまとめ、2024 年 1 月 12 日に健康マネジメント研究科に提出した。